

令和3年度第3回 釜石市子ども・子育て会議開催結果（概要）

1. 日 時 令和4年3月23日（水）9：55～12：10

2. 場 所 鶴住居地区生活応援センター 多目的室

3. 出席者等 <出席委員12人>

藤原伸哉委員、鈴木ゆりえ委員、長田彩委員、菊池啓子委員、藤原けいと委員、  
植田志津子委員、八幡恭子委員、佐々木晴美委員、伊東公一委員、菊池利行委員、  
福成菜穂子委員、黍原豊委員

<市側出席者>

釜石市副市長 晴山 真澄

釜石市保健福祉部長 小笠原 勝弘

釜石市保健福祉部子ども課長 千葉 裕美子

子ども課 主幹兼子ども福祉係長 樋岡 悦子

次世代育成係長 菊池 喜子

次世代育成係 主事 川原 澄玲

釜石市建設部都市計画課 主幹兼管理係長 小笠原 太

管理係 主任 和泉 淳樹

都市計画係長 瀬戸 周

都市計画係 技師 岡道 雄斗

釜石市教育委員会学校教育課 指導係 指導主事 新沼 泰起

4. 傍聴者 0名

5. 経 過

(1) 委嘱状交付

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、委員となられた方の委嘱状は、事前に席へ配布し委嘱状の交付とさせていただいた。

(2) 開 会

千葉課長が定足数を満たしていることを告げ、会議の開会を宣言した。

(3) 副市長挨拶

昨年4月から釜石に来ておりますが、なかなか皆様とお会いする機会がなくて、大変申し訳ございません。もともと土木の方の道を歩んできたものですから、なかなかこういう子育てとか、経験はあるんですけども皆さんと意見交換するという機会がありませんので、いい機会だなと思って喜んで参加させていただいております。

本日は年度末でお忙しい中、会議へご出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃の子ども・子育て支援や、教育・保育施設等におきましては、新型コロナウイルス感染症対策等にご尽力いただきまして、誠にありがとうございます。先ほど、委員の方へ委嘱状、机上に配布ということでございますが、新たに委員となられた方、また引き続き、委員となられました方は、委員の任期は今年の1月から2年間となっているということでございますので、よろしく願いいたします。

本日の会議では特定教育・保育施設の定員の変更について、また、第2期釜石市子ども子育て支

援事業計画の重点プロジェクトの見直しの検討についてを議題としているということでございますので、重点プロジェクトの進捗状況につきまして、特に進捗が遅れているものについて、委員の皆様からご意見等を伺っているところでございます。

今回はこの会議の結果を踏まえまして、指標の見直し及び設定を事務局で検討いたしました。来年度から事業の実施に向け、委員の皆様からご意見等いただき、議論していただきたいと思っております。

最後に、今後の子育て支援施策のさらなる発展のため、十分な審議に繋がるよう、皆様からご忌憚のないご意見等を伺いたいと思っております。よろしくお願ひいたします。

#### (4) 委員紹介

千葉課長から委員の紹介があった。

#### (5) 事務局紹介

千葉課長から事務局の紹介があった。

#### (6) 議 事

##### ①委員長、副委員長の選任

特に意見がなかったことから、事務局から委員長及び副委員長を推薦。委員長に伊東公一委員、副委員長に福成菜穂子委員を推薦し、承認された。その後、2人から挨拶をいただいた。

##### ②特定教育・保育施設の定員の変更について

議事について、事前に配布した資料に基づき、事務局から説明し承認された。

##### ③第2期釜石市子ども・子育て支援事業計画の重点プロジェクトの見直しの検討について

議事について、事前に配布した資料に基づき事務局から説明した。今回の会議では、指標について数値で示せるものについては令和2年度の実績値を計上し、数値で示せないものについては、令和4年度にアンケート調査を実施することで説明をした。また、令和3年度の事業実施状況及び令和4年度に向けての改善方法等について、プロジェクト1から順番に説明し、それぞれのプロジェクトについて委員から意見を伺った。

#### (4) その他

- ・次回会議日程についての説明（7月頃を予定）
- ・次回の会議から、オンラインでも会議に参加できるように検討していきたい。

#### (5) 閉 会

○主な議事での発言は以下のとおり

[議事③第2期釜石市子ども・子育て支援事業計画の重点プロジェクトの見直しの検討について]

##### (1) プロジェクト1：情報発信プロジェクト

藤原伸哉委員：テーマとしての発信だから、発信するツールとしてどうだったかという評価になるんだろうと思うので、あくまでもやっぱり、皆さんのアンケートが出てこないとその課題が見えてこないのかなという認識でいました。

鈴木委員：情報発信についてももう2年以上議論をしてきたと思うんですけど、見る人はもうどんなツールでも見るし、見ない人はLINEだろうが広報見ないよねというところもあると思う。でも、結果のプッシュ型配信とかできる範囲ですごい頑張っていただいているなという印象が最近あって、特にそのLINEを活用した情報発信は、すごい見やすいという人も増えてきたのか

など思っています。

本当に見ない人に対してどのようにして見てもらうかということに関して本当にこれは、答えはでないと思うのでやっぱり数を多くするとか、見てもらいやすくするように質を充実させていくとか、そういうことが考えられるのかなと。

長田委員：初めてなので、まだついてはいけてないんですが、この5年後にどうなったらいいなと思う姿というのが、どれだけ本当に実現できるのかなというところがポイントだなと私は思っています。なので、本当にそれが叶うように、リアルな5年後になって欲しいなというふうに思います。

あとアンケート実施という箇所が何箇所かあるんですけど、これはアンケートというのはどういう形でというのは、決まってるんですか。

事務局：まだ具体的には決まっていますが、基本的には、子育て世代なので、教育・保育施設をメインに配布するのと、小学生もしくは中学生を対象にしてもいいのかなとは思っております。対象を幅広くし、せっかくやるので時間をかけてやりたいなと思っております。

長田委員：おっしゃられたみたいに、見る方は見るけど、見ない方は見ないというので、アンケートも結局、届く方には届くけど、その意見って結局子育てだったりとかそういうことに興味持ってる方のご意見というのが多いかなと思うので、できるだけ幅広い方にアンケートを実施していただきたいと思います。

菊池啓子委員：このプロジェクト2年間関わらせていただいてきて、随分形になって進んできているというのは、すごく今日の資料を見て感じました。この2年間色々出した意見がこういう形になって、まとまってきたというのはすごく嬉しいなと思いました。私の世代から言うと、LINEとかは、ちょっと敷居が高かったりというのがあったが、子育て世代の方たちは結構やってると思うんです。そういう意味合いからすると、広報は見る。広報は多分、皆目を通すんじゃないかなというので、広報の中に、子育てのページを作っていて、シリーズ化して、園長のものだったりとか、あと本当に子育て情報だったり、ずっと載っていてあればいいなと私は思っています。広報を開くと必ず子育てに関して、ここのページがあって、ここに必要なことが載っていて、みたいなのがあってすごくいいなと思っています。それで、今日この資料見ると、この、広報紙の充実で目標値が20から24回からということは、全号に必ず載るというので、それはいいなと思ったんですが「子どもはぐくみ通信」というところの欄が、これが3か月に1回になるということは、これは何かしら企画的に新しいものを考えていて何かしら形が変わるだけであって「子育てに関するここのページを開くと必ず広報毎号載ってるよ」というコンセプトみたいなのは変わらないのかなというように思ってるんですが、多分そうかな。なので、広報に必ずそういう子育てに関するそういうところがあって、開くと何かしら見られるというのはぜひ今後も続けていただきたいし、中身の充実をいろいろ考えていただけたらいいかなあと思っています。

藤原けいと委員：初めてこのプロジェクトを今まで何回か何年かかって、ここまで作り上げてきたんだなということをもまず第1に感じました。

この発信の方法というのが、LINEとかSNSとかというのも、今、社会の中でも普通になっているので、すごく良い方向で進んでいると思います。

ただ、先ほどお話があったように、それを見てもらうというところに行くのが、考えなければならぬところかなと思います。実際、うちの施設でも、保護者さんにアンケートをとる際も紙じゃなくて、ネットでやるとやっぱり反応が大きいとか、今度、例えば連絡帳も、ネットツールを使ってやるとか、それがもう社会の中で普通になってきているので、これをどんどん進めていければいいなと思いました。

あと1つ、5年後に、目指したい姿の何ヶ所かあったんですけども、これは5年の間でどんどん進んでいければという考えだと思うんですけども、きっと5年は、社会はもっと変わってるような気がして、これのもっと具体的な計画とかもあれば、なおいいのかなと思います。お伺いしていました。

植田委員： 今日初めて参加したんですが、この発信プロジェクトを見て、皆さんでいろいろ意見を出してやってくださっているんだなということを感じて安心しました。5年後もまた、色々と皆さんに見ていただけるようになっていたらいいなと思います。

八幡委員： 私、昨年度から参加させていただいていたので、やっぱり少しずつ進展するのはとてもいいなと思っていました。ただその会議の中で毎回出てくるのはLINEを見る人は見るけど見ない人は見ないという意見が、必ず出てくるので、見ない人は何で見ないのだろうというようなことも探るといってもちょっと必要になってくる。なぜ、一生懸命やっているのに見ない人はなぜ見してくれないのだろうというようなことを探るアンケートがあってもいいんじゃないかなと思いました。

あと、広報なんか見てもやっぱり広報を開くと、すごい字ばかりがバーッと出てくるような感じがあるので、子どものことを載せるときは、かわいいイラストじゃないですけども、「ここには子どものことを載せてますよ」「うちの子に関係あることが何か載ってるのかな」というような目で見えてわかるような紙面みたいなのも、目を引いてくれるのかなあと感じていました。

佐々木晴美委員： 先ほど鈴木委員のお話を聞いて、情報発信をどのようにというような形があったんですけど、市内の小学校には必ず学童クラブとか児童館があるので、小学生も広報を見れるように、この会議に参加するようになって、私は自宅から広報が届くと、おやつ時間とかに児童に紹介などもしてたら、先日、5年生の子がその広報を参考に学級新聞を作ったってことを聞いて、児童館のおやつ時間がちょっとは役に立ったかな？と思いました。園長先生のコラムなども、とても参考にはなったんですが、小学生とか児童館とか学童クラブの紹介なども入れると、子どもたちも見えてくれるかなと、今皆さんの話を聞きながら感じました。

菊池利行委員： 実は私、今現職の小学校の先生をやっています。それで、今回このような場に参加することでちょっと色々なものを読んできました。釜石市のこのやり方を見て本当にこの広報で、このような子育てのことを発信するってことはやっぱり大事なことなんだろうなと非常に思っています。学校では今、昔なら学級通信とか広報は紙ベースで渡したんですけど、今みんなデータとかメールで送っています。そうすると、メールで内容等が保護者の皆さんに行くわけですけども、ここにあるように、学校で使っているメールあるいはLINE等にこの市のそういうものもリンクすることによって、もっと広がるのかなって私は感想を持ちました。

それから、その広報の中身、保護者の皆さんが知りたいのって何なのかなど。私の経験から見るとやはり教育相談をどのようにすればいいのかなってことや、教育相談の仕方とか、あるいは子どもの発達をどう見たらいいのかなとか、あるいはこの大きなメディアとの関わり方ですね。どのようにメディアと子ども達を関わらせながら守っていくのか、そういうことの情報をもっともっとカウンセラーだとか、お医者さんとか、そういう声を聞きながらこの広報とか LINE 等に活用できればすごくいいのかな。それがこの将来像にあるようにプラットフォームも、ここに繋がるのかなと私は思っています。

黍原委員：今回こうやって資料をまとめていただいて、ここは進んでいてここは進んでないということがすごくわかりやすくなっていて本当にありがたいなと感じました。

プロジェクト1、プロジェクト2とかにも関わるんですけども、今後アンケート調査をしていくときに、数値設定してみましようということでもそっちも大事だけど、その質というか、中身はどうなんだろうとか、その範囲はどうなんだろうかといったヒアリングの機会や、何かちょっと会話するような機会があるとより鮮明になってくる。

次どの打ち手を取ったらいいとか5年後の先はこうじゃなかったかもしれないといった、数字だけに引っ張られないような取り組みに広がってくるんじゃないかなと思っている。前回計画を作るときもたくさんアンケートいただいてましたけれども、できればそういう対応の機会も、設定していただけるとありがたいなと思いました。あと、先ほど八幡委員さんのおっしゃったように、見ない人は全然見ないのかなとそれが回答の中にあったりとか。

どうしても子ども・子育て会議って、委員に教育・保育施設の方とかが多くて、未就学に引っ張られやすいですけども、本来はこれ、0歳から18歳対象の計画だと思うので、もうちょっと幅広いところで小学生以上の親御さんに対してのサポートとか、そういったところの課題とかどうしたらいいのかを検討する必要があると思います。

ここまでの情報発信のところで、自分が何をその地域の人間としてできるかなと考えた時に自分は発達支援のところで支援をしていて、親御さんからご相談受けてお答えしていると、いろんな方が困っていることだと思うから、これは一般化してお伝えすればお役に立てるかもと思うこともあったりしました。今後、釜石市さんとも子育てに関して一緒に何かやっていきたいなと思いました。

福成副委員長：皆さん意見を出し合ってこのプロジェクトが立ち上がって5年後こうなったらいいなという形がこう見えてきたところなので、本当に5年後に向かって、これが確実に一歩ずつ、その目標値に達成するように、じゃあどう発信していくかというのが一番大切なことだなって感じてました。

皆さんおっしゃるように、私今 LINE で釜石市のホームページを開いて新しい広報を開くと、すごくカラフルですごく見やすく、何かわくわくするような動き出しそうな情報が見える広報になってきて、「こどもはぐくみ通信」の取り組みがすごく毎回楽しみです。

それから佐々木委員さんがおっしゃったように、子どもたちにこれを1つ見せてあげたことで、またそれが広がるというのは確実に見てとれるのであれば、やっぱり私たち大人が意識して、口コミもそうですけど実際動いて小さな行動が、1人、2人と広がっていくんだなというのをすごく、今話を聞いてて実感しましたので、小さな行動が結果的に、この5年後の

大きな成果に繋がっていくんじゃないかなというように考えてます。

一つだけ市の LINE を開いてて、悩み相談のところなんですけど、AI が答えますというところがあります。自分自身、AI が答えてくれるという欄を見ただけでちょっと引いてしまう部分があります。ちょっと冷たさを感じます。

悩みがあったらここにいつでも電話くださいという方がまだ通じるというか、AI がたくさん事例をもってその近い答えを出してくれるんだと思うんですけども、もし自分が子育てをして悩んだときにその AI って言葉を聞いたときに、温かさがちょっと欠けるかなって思いましたね。何か他にいい方法があったら教えていただきたいなと思いました。

伊東委員長：私、某中学校の P T A をやっていた時期が 4 年ぐらいありまして、その時、校長先生と子どもにスマホを持たせるか持たせないかで議論したことがあります。私は賛成派で、校長先生は否定派だったんですけど。これからは、やっぱりそういうところも必要になってくるのかな、ましてや中学、高校になってきた場合ですね、そこで必要になる場面というのが出てくると思うんですね。そのときに人とのつながりで、そのネットの中で対人関係に恐怖心を持った子もいます。いわゆるネットのいじめですね。そういうものもありますし、これって大人のママ友さんの中にもあるとちょっと聞いたことがあります。

やっぱり、これからこういう情報社会の中で必要なものだと思うし、LINE を私も釜石市は登録していますが、いろんな情報も入ってきます。まして今コロナ情報は、LINE、Twitter で全部すぐ入ってきます。それを使いこなすためにですね、やっぱり先ほど菊池委員さんがおっしゃっていたようなカウンセリングとかですね、いろんなことを考えながら、なおかつ有効に使っていただける方法ってものを、今後考えていった方がいいんじゃないかなと思います。

## (2) プロジェクト 2：遊び場開拓プロジェクト

伊東委員長：公園なんですけども、一応全部点検済みということですか。

事務局：保守点検を委託して行っていて、毎年実施しております。令和 3 年度においても、近日中に成果が提出されるということで報告を受けていたところです。

黍原委員：3 点ほどあります。ハードじゃなくてその機能が大事という視点に立って見ていく必要があると思います。皆さんいろいろワークショップを開いていただいたりとか、都市計画課の皆さんも知恵を出し合って、すごくいい公園ができそうだなと工事を横目で見ながら拝見していてすごく楽しみにしています。そのあたり前回意見させていただいて児童館の活用のところ、ソフトのところ機能できるようなアイデアと一緒に検討していただけたらと思っています。

あと子育て支援センターのところ、毎回出ている話ですが、利用してる方って結構大丈夫というか。どうしたら、利用しない方に子育て支援という情報や機能を届けるかということにも一歩是非検討していただきたい。何か支援センターは場所みたいな感じがするんですけど、地域の支援拠点機能だと思うので、具体的なアイデアはないんですけど、待ってるんじゃないかと何か出かけるか。ここに課題として挙がっていた、アンケート 3 ページの子育てサークルや乳幼児健診の集まる場所に向いていくということ。やっぱり弱いのかなと。うちに利用しにきている親御さんとかにご案内していく必要があるなとかやれることを模索している知恵を出し合っていければと思っています。

先ほど 10 ページのところ、子育て支援センターの交流会どうしようかという話があったんですけど、今オンラインで可能だったりとか、まさに情報発信のところでも SNS の発信もあるので、そういったことをぜひ活用していただいて、コロナ禍だからこそ、止めちゃいけない点というか、職員の質向上とか。あと、先ほど利用者が減ってるんだという話もありましたけど、何かこう、例えば LINE 相談できるとか、いろいろオンラインツールを活用したりとか、電話でちょっと相談受けますよとか、もし場所が閉めているけど何かあったらぜひお問い合わせくださいとか、代替のもので検討いただきたい。利用者が減っているということはそれだけ支援が届いていないということだと思う。知恵を絞っていただけたらいいなと思いました。

事務局： 子育てセンター、コロナ禍で閉めてしまっただけとはいえないかなという思いもありまして、閉めた場合でも電話相談はしていますよという形で周知はしておりました。

それからどうしても、我慢して釜石市外に外出しないよう過ごしてるのに、子育て支援センターが閉められちゃうと何処にも行くところないよという形になるので、予約制にしてみましたので、その辺を聞き取りしながら、なるべく対応していただきたいということでは、お願いはしておりました。

LINE とかの相談をやりたいんですけど、なかなかこう、操作について行けなかったりとか、いうところありますのでそういうところも研究しながら、できるところから進めていければいいなと思ってました。これからもご意見いただければと思います。

菊池利行委員： 最初に、遊び場プロジェクトに関してです。私は遠野に住んでいるんですが、すごく羨ましいです。子どもたちが遊ぶ公園ってことで、熱中症対策をしっかり充実して欲しいなと思ったときに、やはりこういう公園が親としては嬉しいんですけども、子どもたちの遊びだけじゃなくて、遊びの達人というか、ボランティアでもいいんですけども、こういう遊びをするといいよね、みたいなボランティア活動で子どもたちと関われるような公園の中のシステムがあれば非常にいいのかなと思いました。

それからあと、子どもたちが公園で遊ぶ時に、何してるのかなあと、時々聞くんですけども、「スケートボードしたいよね」とか。こういう公園の中で今流行ってるんだけどもそういうのをやりたいがなかなかできないというので、やはりそういうふうなものができる場所というか、全部が全部ではないんですけども、そういうふうな公園もあってもいいのかなと私は感想を持ちました。

次に子育て支援の方です。指数の方で、目標値の 8000 人ということで、2 倍近くに増えてるんですけども、私は労働組合の代表ということでなんですが、働く人の人数はどうなるのかな。要するに、目標値が上がるということはそれに対して雇用される人がどのような形でケアされるのかなと。そのサービスを与えるだけではなくて、そこで働く人たちがどういう形でここに関われるのかなということをこのアンケートを見ながら非常にこの共有することが大事だとか、人数的にもこの推移というか、その働く人たちの環境はどういうふうになってるのかなとというところをちょっと聞きたいなと。

事務局： 5つのセンターを委託業務でやってまして、それぞれのところで、常勤職員を雇って対応しております。

それから目標倍近く8千人を目標にしているんですけども、現在の4,801人というのが、コロナの影響ですごく利用者減ってまして、このコロナがもう少し良くなれば、このぐらいの人数に戻ってくるのかなということでの目標設定でございました。

佐々木晴美委員： 児童館の活用ということで、市内には4つの児童館があり、下校後の子どもたちもたくさん利用しています。児童館は遊びを通して健全育成というところが謳われていますが、健全育成の深さには毎日毎日悩まされています。2022年度はコミュニティスクールということで、地域で子どもたちを育てましょうねということで、地域の方や小学校、町内会、などともに児童館等も活用しながらコミュニティスクールのところを学習しているところですが、双葉小学校さんの方と連携しながら取り組んでいる最中です。

児童館の活用って言っても、ちょっと今、コロナ中で、どのように進めていったらいいかなというのが大きな課題になってます。

いろいろな先生方と、交流を深めながら、地域の子どもたちを育てていく役割が児童館には大きいかなと思ってますので、何かのときには力になりたいと思うので、声をかけてください。

八幡委員： まず、びっくりしたのがすごい公園の数だなということを実感しました。反面、これらの管理がされていたというのも考えてしまいましたけども、まず子どもたちが楽しく遊べればいいかなと思います。毎回ですけども、やっぱり鹿のフンが大変です。うちの保育所の近くの公園でもやっぱり、甲子なので何か所か小さい公園があるんですけど、どこに行ってもあるので、その駆除の大変さというんですかね、どうすればその鹿さんが入ってこないで子どもたちが楽しくべるのか。どうしてもフンがあると入れないという感じで、散歩だけして帰ってくるというようなことがとても多いので、対策が何かないのかなと。

植田委員： 保育園の子どもたちも結構休みの日は公園を利用してるという声が聞かれてて、公園の管理をしていただいていることに本当にありがたいなと思っております。個人的に言えばなんですけども、うちの園の近くには公園がなくて遊べるところがないなというのでできれば近くにあったらいいなと思いました。

藤原けいと委員： 公園に関して、釜石は遊ぶところが少ないと思ってましたけど、こんなにあるのかとびっくりしました。そして、ちょっと公園の活用をしてもらうために教育・保育施設への周知を図るというので、さっき何ですか広報見ないとかLINE見ないとかと同じで、そういうのも私達のこの教育・保育施設にも周知依頼がどんどん来れば発信できるので、私たちからも「これ登録してみませんか」って声を掛けられるので、この公園の件に関しても言っていただければなと思いました。

子育て支援センターに関しては、アンケートの実施があって、私たち自身も利用者さんの声を聞くことができ、とてもいろいろ課題ができましたし、この先どうするかってのもいろいろ話し合う機会になったので、本当によかったと思います。

各地域に子育て支援センターがあって、各地域で利用できるよという形で進められるんですけども、何かちょっと正直なところコロナのせいにして、本当に利用者が少なくてそのために一生懸命こう発信したかと言われるれば、コロナのせいにして足踏み状態だったかなというところもあります。



令和4年度はコロナが続くかわからないですが、それは置いといて、やっぱり来てくださる方だけじゃなくって、行きたいけど行けない人とかなかなかこう来にくいなって人や、妊娠している不安はあるけども、誰に聞こうとかそういうところまで、何かこう支援できる方法、やっぱり発信のところになるんですけども、そういうことができないかなあというのをちょっと今、課題としていろいろ検討してる最中ですので、本当に地域のための支援というのができるようになればなと思っております。

菊池啓子委員：まず、公園プロジェクトですけど、ここまで形になったんだというのが正直すごく嬉しい気持ちでいっぱいです。

私がこの会議に関わらせていただいたときに、この鈴子公園どうしようというのが出てきたのが、本当にこんな形になってすごいなというので、本当に4月から利用できるようになるのがとても楽しみです。

それに、あの鶴住居アスレチック公園はですね、うちの園児には非常に好評で、園外保育でバスに乗ってきたりとか、休みの日にそれぞれの家庭でおうちの人と一緒に遊びに来たりというので、結構利用しています。なので、とても人気のある公園なのですが、あとは自分たちの公園だということでみんな大事にしたり、管理をしたりというようなことができなければいいのかなと思っています。鈴子公園の方も、本当に開かれたら、ぜひ園外保育で使いたいと思います。

それから、子育て支援センターですが、甲子の支援センターがなくなるということを受けて、いくらかでも地域のためになればということで、正福寺幼稚園で4月からお受けすることになりました。何しろ園の中の1部屋を使ってなので、今までとは規模が格段に違って、地域のためには言いながら、うまく提供できるかどうか、まだまだわからないところがたくさんありますけど、お寺の中にあるということで、自然には恵まれているのでそういう素材を生かし、何かこう、地域の人とかかわれるようなそういうセンターにしていければいいかなと思っています。

園の先生たちもなんですが、新たに働いてくださる方もいて、手探りでいろんなことをやっている状態なので、この市内にある支援センター同士の交流というか、職員の交流会だったり或いは年に1回くらい合同で何かイベントをこう一緒に進めていけるようなシステムになるといいかなと思っています。

ということで今準備をしてるところですが、いろいろお世話になると思いますのでよろしくをお願いします。

長田委員：プロジェクト2の既存の公共施設についてなんですけども、老朽した設備のというのが4ヶ所というのがあるんですけど、さっきもお話されてたみたいに公園の数がすごい多いというのは感じます。

本当にそれがどこまで整備できているのかなというのも、親としては気になりますし、使ってる側としては信用してるので、遊具に関しても、使っても何の問題もないって思って使ってるので、何回かわかんないんですけど、その全部の公園を整備するお金をかけるのかより、数を減らして年2回にする方が安全なのかという問題もあるのかなと思いました。

あと、私が公園を使って感じるのが、古い公園、まるまつの前だったりとか、コンビニの裏

のところとか、あと、サンデーの横のローソン近くの、公園なんですけども、お手洗いはやっぱり古いなというのをすごい感じて、中に入っていく人も見えるんですね。トイレを使っているときに、娘が滑り台に上っていると、中が多分見えると思うんですよ。自分的には何か嫌だなという気持ちがあるので、老朽化の設備もそうなんですけど、トイレに壁を付けるだとかそういう今あるところを見直して欲しいなと思います。

あともう1つ、子育て支援センターなんですけど、毎月、それぞれのお知らせがホームページに出ると思うんですけど、だいたい1日にはHPに掲載されていないことが多くて、利用者側的に、1日に行きたいと思ったのに、その月の情報がないのがすごい困ると思うので、1日には載せていただいている方が嬉しい。

鈴木委員：3、4年前から大船渡や陸前高田には何かすごい公園があるというので話題になっていて、親御さんも子どもを連れ行くということになってしまっていて、釜石にはないよねということが、お母さんたちの間でも聞こえてきて、ここでもちょっと議論になったりしてましたが、結構思ったよりも早く、釜石にもこれだけ立派でちょっと面白そうな、ユニバーサルデザインというかバリアフリー対応の公園ということで、すごいこれは嬉しいなと思ってます。

保護者を代表して言ったらあれですけど、素直にこれは嬉しくてなんかわくわく、これから楽しみに使わせていただこうと思います。

あとそのトイレが見える問題は結構実は深刻じゃないかなと思ってて、野田町とかもその甲東こども園のすぐ裏のトイレなんかも、男性用なんか丸見えなんですよね。だからこれ、結構その昔はもうそれでやったのかもしれないですけど今は、今どきの子ってやっぱりそのプライバシー意識とかもしっかりしてるし、大規模な改修とかはできなくても、ちょっと目隠しつけるだけでもしてもらえたらありがたい。

あと夏は本当に、くみ取り式のトイレに蚊がいっぱい飛んでてとてもじゃないけどできないという声も聞こえたりするので、ちょっと公園の滞在時間を短くするっているお母さんもいるので、ご検討いただければなと思います。

藤原伸哉委員：子ども・子育て会議での発言で正しいのかどうかかわからないですけど、やはり私の中でも公園の数は多いかなあというところですよ。自分で生活している中で見ていて、子どもがその公園の中で遊んでいる風景をまず見るのが少ない。現状、これを維持していかなきゃいけないのかというのはそもそも議論するべきじゃないかな。そこにかけてる経費を、何か他の方法に充てていく時期じゃないかなあと思う。

あとは地域の中で言えば、子どもの活用だけが公園ではないので、地域の中で地区エリアを、どういう活用していくかみたいところは議論されるべきでしょうし、もしかすると、公園というのは短絡的で、遊び場づくりといたら公園つくっておけば楽だろうみたいな、一番わかりやすいゴールなんだけど、今の子どもたちって公園での遊び方もわかんないじゃないかな。結局ゲームを持って行って「スイッチ」をしてる風景はありますし、あと、学区内に公園が幾つもあるって言うても、行く公園はだいたい決まってて、そうなってくると、使われていない公園は市の税金で整備していく意味が本当にあるのかなって、ここではやっぱり議論をしていいんじゃないかな。そもそもこれ、多分、地域に遊び場がないというのは背景としては震災で、公園に仮設住宅がいっぱい建っててという背景の部分があつてのアンケートだっ

たかなと思うので、今は、ちょっと時期からするとタイムリーではない部分もある。

ただ、鈴子の公園に関してはまた議論はまた別だとは思っているので、そこはやはりまた今後、活用の仕方、あり方というのは期待したい部分かなと思います。

だから例えばですが、鹿の話題もありましたけど、公園を畑にして、自由に農園みたいな形で、地域の人たちに貸し出せるみたいな形の提案があってもいいのかな。子育て世代だって農園はできるかもしれない。あえて畑に行かなくても良いというのは、一つの考え方で、やっぱり地域の中で、公園のあった地区を、どうやって今、時代に合わせた改革をしたらいいかなというのあってもいいかなと思います。

あとは、子育て支援センターの部分に関しては、今現状5ヶ所あるというのはもう本当に、子育て世代からすると、充足してる部分かなと思いますけど、今後長く考えていったときに、これちょっと辛口に聞こえるかもしれないですけど、早くから働く方々が多い社会の中で、この5ヶ所を維持していくというのを、コロナもあるので、単純計算でいうと1日4人ぐらいですよね。

福成副委員長：100か所近い公園が釜石にあります。でも、実際にこの部屋の4分の1ぐらいのスペースにコンクリートを打っただけの公園もこの中にたくさん入ってます。椅子もないです。ここに地域の中の一休みコーナーみたいな感じの公園も中にあります。

今ほとんど皆さんがおっしゃったことは、本当にこれからの維持管理を考えた時の大きな課題として、いつかみんなで話し合わなきゃいけないなって思いました。

地域会議の皆さんにご協力願いましてね、その地域にある公園に関しては地域の方のボランティアが交代でお掃除してくださったり、その子どもたちのためなんだからということで協力呼びかけを是非していただきたい。

それから、親御さんもちよとした掃除用具を持っていけばとは言いませんが、ごみ袋の一つぐらいを持って公園が汚れていたら、一緒に子どもさんとごみ拾いするぐらいの意識を高めて欲しいなという願いがあります。本当に5年後に子供たちが活用してくれる公園があったいね、というような目標値に近づきたいという思いでいました。

鈴子の公園の説明がありました。4月号の広報に載るということで市民の皆さんも大いに期待してます。その中で、小学校高学年、中学生がとても喜びそうなバスケットのコーナーがありました。長年子どもたちからずーっと欲しいって聞いていたので、実現できるんだなと思ってすごく嬉しいです。子どもたち出かけることができ仲間とゲームじゃなくて遊べるスペースができるということも、大いに発信して欲しいなと思いました。

それから子育て支援センターですけど、釜石の子育て支援センターは本当に素晴らしいと思っています。何度か孫を連れておじゃましました。ご父兄の方が待ってる間のコミュニケーション、悩みを相談し合ったり、同じぐらいの子どもさんたちの成長具合を見ながら自分はどうやって子育てこれからしていくという考えにも繋がる。

ただ、今コロナで完全予約制で行っていると説明がありました。早くこの予約制が解除されて誰でも来てくださいという体制を整えていただきたいなと思います。その5ヶ所の維持管理に関して、これもまた、お父さんお母さんたちも子どもさん、0歳児というかもう生まれて3ヶ月ぐらいからお子さんを預けて働く世代が多くなってる中で、維持管理していく問題もこ

れからの大きな課題になると思います。

皆さんのご意見聞きながらですね本当に、どういう方法が、この子育て支援センターの役割としていいのかを、これから 5 年間その結果を見ながら一緒に考えていったらいいんじゃないかなと思います。

### (3) プロジェクト3：子どもと家庭を守るプロジェクト

藤原伸哉委員：最初は子どものことを考えたときに、やっぱり行政の部分がいろいろこう関わってる年代だろうなと思ってたので、ここの部分のイニシアティブをどこが取るのかというところが、行政間であらかじめ整理されていた方がいいんだろうなと思う。

どうしても教育に連動したときに、教育がイニシアティブ取るのか、子ども課が取るのか、どちらが棲み分けってことはないでしょうけど、なかなかここでの力関係が最終的にフォローする時の部分で力関係となってくる。

あとは、逆にこれまでのハイリスクな環境下で育ってきたお子さんたちが大人になってからのフォロー体制というのもまた必要な部分になってくるのかなと。

いわゆる、親を育てていくというか、子育て苦手な親御さんもいてもいいんですよ。あたりまえなので。仕事が得意という人がいる中で、子育てが苦手というお母さんがいてもおかしくない。そこを誰がフォローしてあげるかというところが、やはり大事な部分かなと思うので、その辺も親世代を育てるといいうところも大事なポイントと思います。

長田委員：先ほど藤原委員さんがおっしゃったみたいに、自分も初めて子育てして感じてしたのは、すごい大変だなって。今まで子育てしてた友達とかはすごいなと思ったんですね。

なので、やっぱりお母さんの気持ちとかは子どもに伝わるとし、いかに自分自身がストレスなく過ごすというのが、子どもにも家庭にも良い環境と思って、私は結構、自分自分を取りあえず幸せな感じにすることをベースに置いています。自分がイライラしているときは絶対子どもに対してあたってしまうので。さっきもおっしゃったみたいに、お母さんとか親世代にも、何かあればいいのかなと思います。虐待発生件数が 0 であれば一番本当にいいことだと思うので、そういう環境があればいいかなと思います。

菊池啓子委員：私たち施設で何ができるかなということを考えると、やっぱり、日々子どもたちと触れ合ってるので、子どもって正直なので色んなこと話してくれたりとか、体の様子を見れたりするので、そういう子どもたちの様子を見て気づくとか、あるいはお母さんが毎朝とか送り迎えするときに声を掛けて「何か様子が変わだね」というようなことで話をしたり、そういうことしかできないんですけどそれが大事かなと。そして、そこから何かちょっと大変そうだなとか、何かここの家庭ありそうだなというのをこう気づく力、見抜く力みたいなのは私たち教職員が身につけていかなくちゃいけないのかなというふうに感じています。

うちのところは、虐待事案みたいのは見られないんですけど、お父さんとお母さんが、別れることになりそうだなというような状況になると明らかにやっぱり子どもが違うというのはわかるので、何かあるのかなというのは感じます。だけど、何となくお母さんにストレートに聞けないというのもあるんで、私たち職員の中で情報共有して、お母さんにどういうふうにアプローチするかなんてことをやっていますけど、やっぱり本当に今、結構、お父さんが DV でお母さんが子ども連れて出ていくとか、あるいは特にお父さんだけがなくなってしまったみた

いなことがあったりするので、やっぱり他人事じゃないといういろいろな事案があるんだなということと考えながら、私たち教職員の力を育てていかないといけないかなと思っています。

藤原けいと委員：施設として菊池先生がお話されたように、本当に全く同じ意見なんですけども、やっぱり虐待、こう数字が出てきますけども本当にそれだけかという気持ちもありますし、全国なんていうと、本当に信じられない数字が目につくときもあるんですけども、わたしたち施設としてはそういう虐待、またはそういう、ちょっと全然手をかけてないとか、そういうような事案がありますけどもそれに気づいてあげるといことは、やっぱりそこは私たちの仕事として、気づいてあげるべきかなと思っています。

それはもちろん子どものためでもあり、親のためでもあるかと思っていますので、そこは私たち専門職としてそこは十分に気づいてあげたいと思っています。

それと釜石市の方も、数年前よりは専門的な部分で、すぐ繋がれるシステムになってる。子ども課にも本当にささいなことでも、話を聞いてくれるとか、意見くださったりとか。そういうところのシステムが結構釜石市は整っているんじゃないかなと思っていますので、今後もそういう形で進めていただければなと思っています。

植田委員：結局、同じようなことなんですけども、やっぱり施設として子どもの様子、保護者さんの様子などを気を付けて見るようにして、ちょっといつもと様子が違うなというときに、保護者さんにも声をかけたりとかしながら、そういうふうな支援をしていけたらいいのかなと思っています。

八幡委員：気づく力がやっぱり私たちにとっても大事なことだと思うので、職員で子どもの様子をちゃんと見るということを心がけていきたいなと思っています。

あと、大人の方のフォローという話もありましたが、やっぱり虐待って連鎖があると聞きます。親が虐待を受けてたから、子ども虐待するというような話をよく聞きますので、やっぱりお母さんに対するフォローというのが一番大事なのかなと。それが結局子どもに繋がるし、その子どもがまた自分の子どもにというふうな感じになってくということを考えてと怖いなって思うので、お母さんお父さんへのフォローというのを考えていかなきゃいけないのかなと思います。

佐々木晴美委員：学童だとお弁当とか食生活を見ると感じる時があるんですけど、その時は子ども課さんとか、学校さんとの連携を取るようにして、保護者への対応のところにはとても気づかいながら過ごしています。

あとは、主任児童委員さんの役割って、令和4年度に向けて改善方法等ってありますが、広報では主任児童委員さんはわかるんですけど、どのような活動をしているのかなというところが、ちょっとハテナが出てくる場所があるし、主任児童委員の方たちもどこまでやればいいのかという声も聞くので、これからの課題として、もっていったほうがいいのかと思います。

黍原委員：先ほどコロナと虐待の関連性は見えてこないという話だったんですけども、具体的にちょっと親御さんとやりとりしているとやっぱりこのコロナで外出を避けているとか、接触を減らしているということでストレスを抱えているなあと。虐待までいかななくてもリスクが高まって

きているということを感じています。そのあたり数字として上がってないけども、しっかりサポートをしていく必要があるんじゃないかなと思いました。

先月、県教育委員会が出している要サポートの子たちの割合の数字が出てきて、ずっと沿岸は下がっていたのが、昨年、今年とちょっとずつ上がってきていて、ちょうど岩手日報さんの方でも、コロナの影響があるんじゃないかってことで、やっぱり心のところにコロナの影響が出てのかなあというのを非常に感じているところでした。うちもその療育ってところで、相談に来た親御さんに接していたりとか、学校も関わったりとか、関係機関が繋がっていく必要があるかなというところで、今回設置される子ども家庭総合支援拠点が繋いでいく役割を果たしていただければと思います。

あと、数値のところ、12 ページの虐待通告件数、もし本当に把握するなら他機関の数値も一緒に入ってくると、より地域の状況がわかるんじゃないかなと。どこに最初連絡がいくかということが変わってくると思うので。14 ページの方、虐待件数発生ゼロ、ゼロ目指したいけど、本当にゼロでいいのか。ゼロ目指したいですけどね。

あともう一つは、その一歩手前の、子どもたちの脳の解析している友田先生という方が、虐待じゃなくてマルトリートメントという言葉を使おうと。虐待というとすごくひどい何かに見えるけど、怒鳴るとか精神的なプレッシャーを与えるというのも子どもたちの脳には非常に変化を与えるという話をされている。そういう指標も入ってくるとよりリスクを下げる取り組みが見えてくるのかなと思った。

福成副委員長：やっぱり、目に見えない部分の心の問題って、本当にこれに気づいてくださる一番近いところにいるのは先生方、学校もそうです。気づいて、子ども課に繋いでくれて相談に乗って、解決できた部分もある中でも 60 回。その数を見れば、この数ではないんじゃないかという先生もいらっしやいました。氷山の一角じゃないかと。

特に繋いで、その児童相談所からの相談、ご意見、アドバイスで解決することに一番近いところにいらっしやるわけですから、この心の声に気づくということに本当に皆さん努力して、これからも努力していただきたい。今もちろん敏感になってなお、子どもたちに向けてらっしやる努力していらっしやるのも重々承知です。でも、まだまだ自分の声を発することもできない子どもたちがいるってことも、職員の中で話し合われて欲しいと思います。

震災から幼児期に震災の時期に生まれて、幼児期 3 歳ぐらいまでの子どもたちが今小学校の高学年、中学生になっています。その子どもたちが、岩手県で一番、釜石市が登校拒否の児童生徒が多くなっているという問題が、釜石には生まれてきています。

でも、解決策はいくらでもこれからの話合いで見つけられると信じてますし、登校拒否が悪いというんじゃないです。登校拒否した子どもをどのような形で導いていくかを、みんなでアイデアを見つけて育てていかないことには、釜石市の子どもたちに未来はないと思ってますので、そういうところにもぜひ皆さんのご意見をいただいて、小さなことから解決していく方法を話し合っていきたいなと思っています。